

天文異変記事と平家物語

楊 夫 高

要 旨

本文対『平家物語』中の两个天文現象・彗星 金星犯昂星 の描写方法及作用进行了论述。

「覚一」版本里描写的这两个天文现象都暗示了故事情节的发展。笔者认为它们与「末法及平家灭亡」这一构思具有紧密联系。围绕这两个天文现象，本文在比较分析了中国及日本的相关历史记载的基础上，对『平家物語』中具有代表性的十三个版本进行了研究，从而得出 由于各版本整体构思上的差异，两个天文现象的描写方法也不尽相同。其中，「覚一」与「流布」两版本以 彗星 暗示了因平家暴行而导致的佛法・王法衰退，以 彗星 金星犯昂星 预示了平氏家族灭亡的结局。

キーワード…… 天文異変 予兆 末法 構想

はじめに

覚一本『平家物語』には、天文異変が二つ記されている。それ

は、彗星出現（巻第三）、太白昂星犯合（巻第六）である（1）。

現代人の天文に対する感じ方とは全く異なるが、古代中国人は彗星出現、惑星同士の犯合、日食、月食などの天体の異変を、人間の世界の出来事に深く関わるものと考えていた。『史記』・天官書（2）に、「日月運行、歴示吉凶也」と記されるのがその考えの端的な現れである。日本でもその考えが受け継がれている。また、斉藤国治によれば、古代の天文観察の主要目的が自然科学の探求ではなく占いであり、陰陽寮から内奏する天文異変の占書の内容は、天子個人の生命または国家の危殆に関連する極秘事項であった（3）。『平家物語』は平安時代末の政治体制、宗教体制等の大きな動乱を記しているが、「天子の生命、国家の危殆」というほど重要視されている天文異変が、その『平家物語』で二つしか記されていないことは、どう考えていいのだろうか。

『平家物語』は忠盛昇殿の長承元年（1132）から書き始め、正治元年（1141）の六代被斬までの六十八年間の出来事を取り上げているが、この六十八年間に、彗星出現や惑星同犯などのような天文異変はこの二回だけではない（4）。私の調査によれば、治承二年の 彗星出現 を含め、彗星出現は計十九回も観察され（5）、養和二年の 太白昂星犯合 を含め、惑星現象は八十回もあったのである（6）。多く現れた天変の中に、平家物語は、治承二年の 彗星出現 と養和二年の 太白昂星犯合 との二つだけを取り上げているのは、物語の構想に絡んでの取捨選択があったからではなからうか。

平家の興亡及び乱世末代を描く平家物語において、この二つの天変は、記述位置から考えると、物語全体の構想に関わっているように思われる。

まず、覚一本『平家物語』における二つの天変記事とその位置を確認する。

一、覚一本に記される二つの天変

1、治承二年（1178）正月における 彗星出現

同正月七日彗星東方にいつ。蚩尤氣とも申す。又赤氣とも申す。十日日光をます。（巻三 敘文 『平家物語』 一八五頁）

極めて短い記述であり、彗星出現の意味が本文中では明記されていない。しかし、「蚩尤氣」とも申す、「赤氣」とも申す」と、二回も別称を紹介するのは強い印象を与え、また「光をます」とも書き加えることにより、不気味なイメージが伝わってくる。

彗星記述は、巻三が始まって間もなく記されるのだが、巻二の「大納言死去」や「康頼祝言」などの「鹿谷事件」の後日談、及び仏教の衰微を表す「山門滅亡」「善光寺炎上」などをうけて巻三が始まる。巻三の巻頭は「鹿谷事件」をめぐって、法皇は「御憤りいまだやまず」、清盛は「君をも御つしるめたき事に思ひ」

と、互いに深い不満を抱いている様子が記される。この不満が一触即発しそうな状況の中、彗星の出現が記され、続いて「中宮懐妊」の記事となる。

2、養和二年（1182）二月における 太白昂星犯合

さる程に養和も二年になりけり。二月廿一日太白昂星をかす。天文要録に云、太白昂星を侵せば四夷あこる」といへり。又、將軍勅命を蒙つて国のさかひをいつ」ともみえたり。（巻六 横田河原合戦 『平家物語』 四七六頁）

「太白昂星をかす」とは、惑星同士の犯合である。彗星出現の記述と違って、『平家物語』は、『天文要録』の記載を引用し、太白昂星犯合という天文現象を「四方の蛮族が蜂起する」、また「將軍が勅令を受けて国外へ出る」と、動乱の凶兆であると示す。

巻六は高倉院の死去、清盛の死去、義仲と城氏との対戦などを記してから、太白昂星犯合が記される。太白昂星犯合の前に、平家一族の昇進する記述が見られる。前には、中宮が院号・建礼門院をいただいたことと、後には、「平家の人々大略官加階」である。しかし、続いて法皇が平氏を追討するという噂による大騒動、横田河原合戦の大敗などが対照的に記される。

彗星出現 は、「鹿谷事件」の悲惨な後日談及び清盛と法皇との対立、仏法の衰滅を表す諸事件を背景として、平家一族が外戚としての地位を固める「中宮懷妊」記事との間に記される。

太白昂星犯合 は、高倉院の死去、清盛の死去、義仲と城氏との対戦などの、不気味な平家側に不穏な情勢の中で、中宮院号、平家の昇進という平家にとってのめでたい記事の間に記される。いずれも背後に暗雲がありながらも平家にとっての栄華記事という中で、二つの天文異変が記されている。平家の運命に忌まわしいイメージを加え、物語の展開をほめかしているように感じられる。

二、記録類に記される二つの天変

1、平家物語の天変記事と史実

平家物語に記される二つの天変記事は、史実上に本当にあったのだろうか。

彗星出現（治承二年正月七日―十八日）について

『玉葉』(7)、『山槐記』(8) いずれも、治承元年十二月二十四日、治承二年一月七日に、彗星が二回出現したことを記録している。まず、『玉葉』治承二年正月十八日の条に、

泰茂来云、去七日彗星見、去年十二月廿四日又見云々、今夜公家、有玄宮北極御祭（泰親朝臣奉仕之）彗星者第一之变也、去年惑入太微、今年彗星見、乱代之至、以之可察云々。

と記す。「第一之变」「乱代之至」と、大変凶兆視されている。また、『玉葉』文治元年正月五日の条にも彗星出現が記されている。

此間、天文博士廣元来、申云、去元日、異方赤気、其躡類彗、所置尤氣（氣一作旗）、也云々、其占尤重、除舊布新之象也云々。

と書いて、「除舊布新之象」ととらえている。

『山槐記』治承二年正月七日の条には、

今晚異方彗星出…凡彗星者希代之变、除舊布新之象也、本文所載兵喪水旱疾疫謀反飢饉等之類、随行度有其徴。

と記した後、舒明天皇時代から、天養元年までに四十一回彗星が出現したことを列挙し、彗星出現を「除舊布新」、「動乱謀反」や、疫病飢饉などの、世の中の災害及び各種重大事件の予兆だと、解釈している。

『玉葉』は「第一之变」、『山槐記』は「希代之变」、両方とも「除舊布新之象」と記し、彗星出現は天体異変の第一として、も

つとも恐れられていたことがわかる。それが平家物語に記された実際の時代における彗星のとらえかたであった。

太白昂星犯合（養和二年二月）について

『玉葉』の養和二年二月二十三日の条に、太白昂星犯合の記述が見られる。「午刻、秦親朝臣来…此間、金星欲犯昂宿、若如存犯之者、殊勝大事之变也」と、大変凶兆視しているようである。

『玉葉』『山槐記』に『平家物語』に相当の記述が見られ、二つの天変記事は史実をもとにしたものだとは分かる。

2、中国、日本における 彗星出現 の認識

記録類を調べてみると、昔中国及び日本では、彗星の出現は何かの重大事件の予兆だと考え、出現するたびに占いが行われたようである。まず『史記』における彗星の記述を見てみる。

『史記』・天官書によれば、彗星出現は重く受け止められている。「蚩尤旗類彗而後曲象旗、見則王者征伐四方」という記述がある。「彗に類して後曲り、旗に象る」と彗星の形を紹介し、「王者四方を征伐す」と兵乱を予兆することを指摘する。

また同書では、彗星出現に対し、「天彗者…見則兵起、除舊布新」と解釈し、兵乱のほか、「除舊布新」とも記されている。

さらに彗星出現の具体的な例として、

秦始皇之時、十五年彗星四見、久者八十日、長或竟天。其後秦遂以兵滅六王、並中国、外攘四夷、死人如乱麻、因以張楚並起、三十年之間兵相駢籍、不可勝数。

と、頻繁かつ長い間出現する彗星は、秦始皇の中国統一による兵乱を暗示したのだと解釈している。

『史記』の記述を総合すれば、彗星出現は「除舊布新」の兆し、「兵乱」の予兆であるということになる。

『史記』だけではなく、ほかの中国正史も、彗星出現を重要視している。

『漢書』・天文志に、「彗所以除舊布新也…改更之象也。其出久者為其事大也…其後卒有王莽篡國之禍」と記し、彗星出現は「王莽の謀反」の予兆であったという⁹⁾。

『後漢書』・天文志に、「(建安)二十三年三月、孛星晨見東方二十餘日、夕出西方、占曰「除舊布新之象也」とするのは、『史記』の「除舊布新」と同様である¹⁰⁾。

中国の正史のほか、『太平御覧』・天部⁽¹¹⁾をみると、彗星は惑星同士犯合などの天文現象から分けられ、特別に「妖星」という項目にまとめられている。『史記』などからの転載のほか、

劉向洪範傳曰彗星者去穢布新者也此天所以去無道而建有徳也、鄭玄

曰彗星主掃除、又曰彗星者君臣失政濁乱三光五星逆錯變氣之所生也。

という記述も見られる。「君臣失政」のような政治批判の視点のある一方で、「去無道而建有徳」といいうわば前進的な方向で「去穢布新」ととらえる解釈も見られる。

彗星出現に対する中国での受け止め方を総合すれば、「除舊布新」、「兵乱」や「君臣失政」などを主としているようである。

日本ではどうなのだろうか。六国史には、彗星出現が二十二回記されているが¹²、それらに対する解釈はほとんど記されていない¹³。

例外的に六国史で解釈も記載されているものを挙げると、『日本書紀』・卷二十三舒明天皇に見られる¹⁴。

六年秋八月、長星見南方、時人曰彗星。七年春正月、彗星廻見于東…十一年正月己巳、長星見西北。時旻師曰、彗星也、見則飢之。

と、三回の彗星出現を記し、彗星は飢饉の予兆として解釈している。

『続日本後紀』¹⁵承和六年の条に、「正月丙子、彗星見兌方、長一許丈…二月丁卯、令東西兩寺講読般若心經、以彗星頻見也」と記して、般若心經を講読させる理由を彗星が頻繁に出現したた

めだとしている。重く受け止めているのである。

天文道に関する勅文を知ることができる『諸道勅文』¹⁶を見てみると、

天文録云。彗星去穢布新也。此去無道而建有徳也。…彗星者君臣失政、濁乱三光、五星錯逆、變氣之所生也。白彗金精。主臣争權。又云。彗出有反者。兵起。其国乱。主死不出一歳。

と、「去穢布新」のほか、「主臣権を争う」「拳兵して謀反する者がある」「一年以内に国が乱れて主が死ぬ」と、三つの意味で彗星出現を解釈し、いずれも国の存亡、君主の運命に関わるような重大事件の予兆として受け止めている。

古代中国も日本も、「彗星出現」を重く受取って、主に「除舊布新」、「兵乱」及び「君臣失政」「主臣争權」の兆しとしてとらえているようである。

3、中国、日本における 太白昂星犯合 の認識

『平家物語』の 太白昂星犯合 は、『天文要録』の引用によつて、「兵乱謀反」を予兆しているが、太白昂星犯合 がもともとそのような現象として考えられていたのかどうかについて確認しておこう。

まず『天文要録』⁽¹⁷⁾を確認してみる。但し本来あるべき「太白占第九」は現在失われているため、「昂占第廿八」しか確認できなかった。「昂占第廿八」には『平家物語』の引用するような占文は載っていないが、太白昂星犯合を「其国侯王有咎印逆死不出半周」、「大將軍失国堺不出五年」、「大人當之兵起期三年」などと、いずれも国家的な大変事ないし兵乱につながるものとして解釈している。

また、『史記』天官書は、昂星について「昂七星…揺動若跳躍者、胡兵大起、一星不見、皆兵之憂也」と、太白については「太白出則出兵、入則入兵」と記し、両方とも「兵乱」に関するものとして解釈している。

さらに、『後漢書』・天文志に、「延光三年二月辛未、太白犯昂」と記され、注に石氏星占・『太白守昂、兵從門闕入、主人走。』^欽 萌曰・『不有亡国、必有謀主。』又云・『入昂、大赦』と、太白昂星犯合は、「兵門闕より入り、主人走る」「国を亡ぼすこと有らず、必ず主を謀ること有る」と、兵乱が起こり、君主が逃げ出して命が危つくなると解釈している。平家物語が引用する『天文要録』の占文と、「兵乱」を予兆するという視点で一致しているといえよう。

日本では、養和二年以前は、一回だけ太白昂星犯合が観測されたようである⁽¹⁸⁾。それは、『日本紀略』⁽¹⁹⁾寛平五年五月の条「廿九日戊戌、日入時、太白失度、守昂星北旁」である。この現象に対する占文が付されていないのは残念である。

1-3のまとめ

『平家物語』に記される二つの天変は、古代から重要視されてきた。中国および日本では、彗星出現を主に「除舊布新」、「兵乱」及び「君臣失政」、「主臣争権」の兆しとしてとらえていたようである。さらに「玉葉」、「山槐記」の記録によれば、彗星記事は史実をもとにしたものであり、平家物語に記された実際の時代において、「第一之変」、「希代之変」、「除舊布新之象」としてみているようである。

太白昂星犯合は、古代中国が「兵乱」の兆しとしてとらえ、物語における『天文要録』の引用と一致する。『玉葉』に同じ天変が記され、「殊勝大事之変」と、かなり凶兆視している。

三、二つの天変記事の先行研究

二つの天文異変と構想との関わりを論ずる研究を概観する。

彗星出現 に関しては、水原一は、卷三の不穏な歴史の前兆だと述べ、⁽²⁰⁾松尾葦江は、治承二年という年を暗示するものと指摘している。⁽²¹⁾佐伯真一は、彗星を含める巻三前半の怨霊の恐怖や不吉な予感を安徳帝の暗い運命と関わるものと解釈している。⁽²²⁾三氏ともに比較的近い射程内の予兆としてみている。

太白昂星犯合 に関しては、美濃部重克は兵革と平家の滅亡の予兆だと述べ、⁽²³⁾『四部合戦状本平家物語全釈・巻七』は、天

文要録の引用の本来の形が「將軍が四夷に國境を侵される」と指摘している⁽²⁴⁾。

二つの天文異変をあわせて詳細に検討しているのは、小野美典である。小野は彗星、金星などの七つの天変地異(二つの天文異変、五つの地異)を手がかりに、物語の構想を論じている。慧星は単に巻三・巻四の伏線となつてのみならず、平家滅亡を視野に入れて、具体的には、安徳天皇を忌まわしき運命を背負った帝として誕生させたと論じ、巻六の金星は、平家滅亡を見通したものであり、具体的に「四夷おこる」という形で明示し、巻を追うことに平家滅亡へと収斂されると指摘している⁽²⁵⁾。

二つの天変記事が平家の滅亡する運命と絡ませて書かれるという小野の指摘に私も同感であるが、それぞれが指し示すこと、どのように平家の滅亡に関わるのかについては、平家物語のもう一つの主題・末法思想との関わりで考えるべきではなからうか。

『平家物語』と末法思想の関わりは多岐にわたるものと考えられるが、時枝誠記は「原平家」の構想であると指摘し⁽²⁶⁾、さらに、佐々木八郎は、覚一本平家物語における末法思想の要素を細かく検討した⁽²⁷⁾。

両氏の研究を踏まえ、関口忠男は、「流布本『平家物語』前半部における末法思想、後半部における因果応報思想は、いずれも「滅び」の論理として用いられる」「前半部の巻々を統一しているのは、「滅び」を描くものとしての、仏法と王法との滅びの叙述であったと見られる。『平家物語』後半部には、「滅び」の叙述

としての、平家一門の滅びが描かれているとみられる」と指摘する⁽²⁸⁾。

二つの天変記事に関して、関口は、屋代本における彗星出現の評言「天下大ニ乱テ国ニ大兵乱起トモイヘリ」により、彗星出現を末法的事象として見なしているが、「流布本の場合は「赦文」に前後の事件と無関係に記録的に記述されているのみであるのに対し、屋代本の場合は巻第二の最後の記事となっており、しかも予見的な評言さえも加えられている」と述べている⁽²⁹⁾。伝本によつて構想上の関わり、差異があることを認めているのである。私は、彗星出現のみならず、太白昂星犯合も、末法という物語の構想に深く関わっているものであり、その構想に基づいて位置を与えられたのであると考えたい。

四、覚一本における天変記事のあり方

二つの天変記事ともに物語の前半部に記されているのは、物語全体の構想にとつて予兆的な役割が与えられているからである⁽³⁰⁾。

彗星出現については、関口忠男は「赦文」に前後の事件と無関係に記録的に記述されている」と指摘しているが、私は、物語上明記していないが、既に検討したように、彗星出現は「除舊布新」、「兵乱」及び「君臣失政」、「主臣争権」などの兆しであると、解釈するのが一般であり、その解釈を背景にして考え

るべきだと思われる。

太白昴星犯合 は、『天文要録』の引用を通して兵乱とのつながりで解釈していることは明らかである。それが巻六以降に記される戦闘描写とどのように関わるのかを考えたい。

佐々木八郎、関口忠男の検討を参考にしながら、二つの天変記事と末法との関連で見なおしてみよう。

1、仏法衰微記事から「彗星出現」を見る

仏法衰微記事は平家物語前半に集中するが、二つの天変記事とあわせて整理してみる。

巻一 額打論 清水寺炎上 鷓川軍・願立・御輿振

巻二 座主流 **山門滅亡(治承元年九月)**

善光寺炎上(治承元年九月頃か)

巻三 彗星出現 (治承二年正月)

巻四 敵島御幸(新院の敵島参詣)

三井寺炎上(治承四年五月廿七日)

巻五 奈良炎上(治承四年十二月廿八日)

巻六 新院崩御(奈良炎上の後日談・南都の荒廢)

巻六 太白昴星犯合

まず注目するのは 彗星出現 を境として、性格に変化が生じ

ていることである。

彗星出現 前の仏法衰微記事は、平家の悪行とは直接的な関りが無い。二条院葬送時の興福寺・延暦寺の額を打つ順序をめぐる衝突を記す「額打論」、仏教教団の対立による「清水寺炎上」、西光父子の悪行による「鷓川軍」、「願立」、「御輿振」、「座主流」、宗教的対立の結果、延暦寺の荒れ果てた様子を記す「山門滅亡」、原因不明の「善光寺炎上」などなど。いずれも社会全体の世相としての仏法衰微が記されている。

しかし、巻三の彗星記事以降に記される新院の敵島参詣、三井寺炎上、南都炎上、南都の荒廢になると、平家の悪行による仏法衰微を表す事件に一変する。新院は法皇のことを清盛にとりなすため、帝都の寺院をさしおいて、平家が尊崇する敵島へ参詣する「敵島御幸」、平氏が三井寺を焼き払って、僧たちを処罰した「三井寺炎上」、平氏の放った火に大仏は焼け落ち、焼死者はあびただしい数にのぼって、「天下の衰微」を象徴する「奈良炎上」、冒頭に「仏法王法共につきぬる事ぞあさましき」との評言及び僧官の解任などの奈良炎上の後日談を記す「新院崩御」。仏教関係の一連の記事とみることも出来るが、彗星出現記事を境としてみるならば、仏法衰微の原因が平家の悪行であると変わって行く。このような記事の配置及び解釈は意図的ではなからうか。

さらに彗星記事前後の仏法衰微記事を詳しく見てみると、山門滅亡、善光寺炎上、三井寺炎上という三つの記事における虚構に気づく。

山門滅亡の事件は、物語上は治承元年九月としているが、『玉葉』治承二年十月四日の条によれば、治承二年十月四日のことである。

善光寺炎上は、物語上「其比」と記すだけだが、前後の記事を見てみると、治承元年九月頃と推定できる。しかし、『吾妻鏡』文治三年七月二十七日の条³⁰⁾によると、治承三年のことであつたらしい。

となれば、山門滅亡も善光寺炎上も、「治承二年正月」の後に発生した事件であるが、時間を改め、約一年ないし一年半ぐらい早い位置が与えられている。物語上では彗星記事の前に発生する事件となる。この二つの事件の時間の改変は 彗星出現 のねらいを示す重要な手掛かりになると思われる。

また三井寺炎上は、治承四年五月廿七日と記されているが、『玉葉』『山槐記』等によると、治承四年十二月十一日³¹⁾が正しいのである。三井寺炎上の時間改変について、覚一本「三井寺炎上」の巻頭には、「南都、三井寺、或は宮つけとり奉り、或は宮の御むかへに参る、これもつて朝敵なり。されば三井寺をも南都をも、せめらるべし」と記し、三井寺炎上を以仁王事件との関連から描いていることが、明らかである³¹⁾。

しかし、三井寺炎上の記事においては、時間だけの虚構ではない。『玉葉』治承四年十二月十二日の条によると、「堂衆勢少引退、向江州方了、官兵等焼払三井寺近辺、並寺中房舎少々、不及堂舎云々」と記され、その火事は房舎にとどまるだけで、物語に記さ

れる「堂舎塔廟六百三十七宇、大津の在家一千八百五十三宇、智証のわたり給へる一切経七千余巻、仏像二千余体、忽ちに煙となるこそかなしけれ」と比べて、はるかに炎上のレベルが違っている。そこまで三井寺炎上の焼失を誇張するのは、平家の悪行を強調し、平家の悪行による仏法の衰微を印象的に表したいのではないだろうか。

「山門破滅」「善光寺炎上」を 彗星出現 の前に発生したように虚構し、また「三井寺炎上」の焼失状況をはるかに誇張しているのは、物語の前半の構想・末法の構想によることであろう。物語の前半に記される末法現象の仏法衰微は、二段階に分けて記されていると思われる。

第一段階は彗星出現以前であり、山門破滅、善光寺炎上を含む平家の悪行と関係なく、社会的な仏法の衰微記事が記される。

それから、法皇と清盛との不満を記す記述、と平家一家のますますの繁栄を表す中宮懐妊記事の間に、主に「除舊布新」、「兵乱」及び「君臣失政」「主臣争権」の兆しとしてとらえられていた 彗星出現 が記される。

物語上明言してはいないが、「除舊布新」「君臣失政」ということから、第二段階において、平家のますますの出世に伴って、平家の悪行も一段とひどくなり、具体的に彗星出現はその悪行による三井寺炎上、南都炎上などをほめかしているのではないだろうか。

山門破滅と善光寺炎上における時間の改変、三井寺炎上における炎上状況の誇張はその構想をうかがわせる証拠となるだろう。

2、王法衰微記事から「彗星出現」を見る

次に、関口忠男の論文：『平家物語』の主題・構想と末法思想における王法衰微の記事の判断を踏まえ、王法衰微を表す記事を整理してみる³²。

卷一 殿上闇討 禿髮 吾身栄花 二代后 殿下

乗合 鹿谷 内裏炎上

卷二 「西光被斬」から「大納言流罪」までの鹿谷事件の後日談

卷三 彗星出現

卷三 大臣流罪 法皇被流

卷四 殿島御幸（高倉天皇讓位・安德帝即位・新院の殿島参詣）
高倉宮・頼政の謀反

卷五 都遷 都帰

卷六 太白昴星犯合

彗星記事以前に記される王法衰微記事の性質は様々であり、四つのグループに分けてみる。

まずは「殿上闇討」「吾身栄花」である。平家一族の昇進記事

であるが、「殿上闇討」では末世の乱れを嘆く「末代いかがあらんずらむ、おぼつかなし」、「吾身栄花」では平家一門のみの繁栄を描き、「兄弟左右に相並ぶ事、末代とはいひながら、不思議なりし事どもなり」と批判する。

二つ目は、皇室内部に直接関わる事件「二代后」「内裏炎上」である。「二代后」は世上の不穏な動きや院・内の対立などを示し、皇室の内部の対立から王法の衰微を表す。「内裏炎上」は山門と院庁の対立抗争によることであり、王法の代表である内裏の炎上は、王法衰微そのものである。内裏炎上は、彗星出現以前の王法衰微記事の頂点とも言えよう。

三つ目は、平家の悪行記事。反平家の動きを封じるための「禿髮」、王法を守る立場にある摂政・基房を乱暴する「殿下乗合」である。これらは平家の悪行による旧来の政治体制・王法への冒瀆である。

最後は反平家の動き及び平家の激しい反発。それは「鹿谷」及び「西光被斬」から「大納言流罪」までの鹿谷事件の後日談である。この類に現れる王法の衰微というのは、「よしなき謀反」・鹿谷事件への批判と、謀反を厳しく鎮圧する平家の振る舞いととの二つからなっている。

卷一・卷二、すなわち彗星記事の前の王法衰微の記事は、平家の悪行記事を含みながらも、全体としては「内裏炎上」を象徴とする王法衰微の様々な姿にあると考えられる。その末世の王法衰微の全体像の中に、平家の悪行は一部に過ぎなかった。

中宮懐妊の直前に慧星記事が記され、後の安德帝誕生により、平家の外戚としての明るい将来が保証され、清盛をはじめとする平家はますます思うままに王法を踏みこむようになっていく。法皇と清盛との対立と、中宮懐妊との間に記される 慧星出現は、安德帝の誕生によりますます強くなる平家一門の更なる悪行の幕が切つて落とされるような役割を果たしているといえよう。

慧星出現 以降に記される王法衰滅記事をもてみると、専ら平家の悪行による王法の衰微が記されるようになり、しかもますます規模が大きくなる。

具体的に見てみると、清盛が関白基房以下多数の公卿を解任し、関白や師長を流す事を記す「大臣流罪」、法皇を鳥羽殿へ監禁する「法皇被流」、特に病気がないのに、高倉天皇に強いて三歳の安德天皇に譲位させ、新院は法皇が監禁されることにより清盛にとりなすため厳島参詣すると記す「厳島御幸」、清盛の思うままに福原遷都まで行われ、法皇が再び監禁されたと記す「都遷」など、大臣を流す 法皇を監禁する 高倉天皇譲位・安德帝即位 都遷、平家の悪行がますます過激になり、慧星出現以降に記される平家の悪行事件は、いずれも国家政權、皇族内部を思うがまま動かせるような、王法衰微の事件といえよう。

慧星記事を境にして、作者は末世の王法衰微の全体像から平家一族の更なる悪行へ発展し、平家の悪行暴行はますますひどくなり、これらの記事はまさに慧星が意味する「除舊布新」、「君臣失

政」、「主臣争權」のことといえよう。

3、二つの天変が示す「動乱」

「除舊布新」、「君臣失政」、「主臣争權」などの兆しとしてとらえる 慧星出現 を境にして、伝法・王法衰微記事は平家の悪行に原因とすることになると論じてきた。

一方、慧星出現 は、「兵乱」の兆しとしての解釈もあった。それは、太白昴星犯合 が、「動乱」の予兆という解釈とつながるものである。一体、二つの天変記事は、どんな動乱の兆しであり、どのように動乱を暗示しているだろうか。

物語に記される主な動乱記事を整理してみる。

巻一 **鹿谷事件**

巻二 鹿谷事件の露見及びその後日談

巻三 慧星出現

巻四 **高倉宮・頼政の謀反**及びその後日談

巻五 源氏の反平家の動き（早馬など）

巻六 太白昴星犯合

横田河原合戦

巻七の「都落」からの**源平合戦**

平家物語に記される動乱記事は、主に「反平家の動き」とみて

よいだろう。物語に記される反平家の動きは大きく三つに分けられるだろう。それは 彗星出現 以前の鹿谷事件、彗星出現と 太白昴星犯合 の間に記される高倉宮・頼政の謀反、太白昴星犯合 以降に記される源平間の戦闘・源平合戦。

二つの天変記事を境に、反平家運動がますます高まる。鹿谷事件は密告により露見してすぐに鎮圧され、抵抗なして終わってしまった。高倉宮・頼政の謀反は露見してから平家の軍勢と戦ったが全滅した。源平合戦は都落ちを以って平家の逃亡生活がはじまり、壇ノ浦において平家が滅亡に至った。平家の仏法・王法衰微させる振る舞いにより、反平家運動が次から次へと起こり、これらの動乱記事自体も、王法衰微・末世の現れであろう。

彗星出現に「兵乱」の予兆の意味があるならば、具体的には、高倉宮・頼政の謀反を指し、「太白昴星犯合」は具体的に巻六以降に記される源平合戦という争乱を指すものと考えられるだろう。物語は、二つの天変記事を配置して、波状的な反平家の動きを予兆する。二つの天変記事は呼応し合って平家の滅亡する運命を暗示していると思われる。

1-3のまとめ

二つの天変記事は、末法の世相を平家一族の滅びに関連させようという物語の構想に深く関わっているものと考えられる。末法

的な記事としてよくいわれる五大炎上記事は彗星を境にして、平家の暴行による炎上になる。五大炎上のように、彗星記事を境に、その前に記される末法現象は、末世の社会的な乱れを中心に描いている。その後記される末法現象は、主に平家の悪行による末法現象となる。

覚一本『平家物語』は、彗星出現 を記すことを通して、平家の悪行による仏法衰微・王法衰微を暗示しているといえよう。また「兵乱」というとらえ方で、彗星出現 は具体的に高倉宮・頼政の謀反への示唆を通して、源平合戦を予兆する 太白昴星犯合 とともに、平家の滅亡へつながっていくと思われる。

彗星出現 が暗示する平家の悪行による仏法衰微・王法衰微記事は、平家滅亡の原因であり、太白昴星犯合 が暗示する源平合戦は平家滅亡の結果であろう。

覚一本における二つの天文異変記事のあり方は、平家諸本に共通の構想なのか、それとも覚一本の独自の構想なのだろうか。主要な諸本の検討によって考察を進めたい。

諸本は、語り物系の百二十句本（新潮日本古典集成）、流布本（桜楓社）、屋代本（新典社）、中院本（未刊国文資料及び国会図書館蔵本の複写）、国民文庫本（国民文庫刊行会）、竹柏園本（天理図書館善本叢書）、平松家本（古典刊行会）、読み物系の延慶本（勉誠出版）、長門本（国書刊行会）、源平盛衰記（早稲田大学出版部）、および四部合戦状本（汲古書院及び「文学」一九六六年

十一月号。なお、『訓読四部合戦状本平家物語』を参照した。)、源平闘争録(講談社学術文庫)を対象とする。

五 諸本検討の結果

覚一本を含め、十三の諸本における二つの天変記事を検討してみる。

まず諸伝本の記述を概観する。

諸伝本における 彗星出現 については、流布本は覚一本と同様であるほか、出現日時を治承元年にして解釈が記される国民文庫本などの四本、治承元年と治承二年に二回も彗星出現を記す百二十句本などの五本、諸伝本に記される彗星記事は様々のようである。四部合戦状本は巻二が欠巻、巻三に 彗星出現 の記述はない。源平闘争録は巻三が欠巻、巻二相当の「一之下」に記述はない。

諸伝本における 太白昴星犯合 の記述を確認してみると、源平盛衰記の相当部分が欠巻のほか、記述内容は覚一本とほぼ同様に、諸本揃って「兵乱」の兆しとして取り上げていることが分かる³³⁾。

伝本によって異なる形をみせている 彗星出現 記事については詳しく検討して見る必要がある。諸本における 彗星出現 の記述を次の頁の表のように整理してみた。

私見によれば、彗星記述の位置、彗星出現の時間、彗星記事に

解釈があるかどうかにより、諸伝本はA・Cの三つのグループに分けられると思う。

A 解釈なし・治承二年における 彗星出現

流布本は覚一本と同様に、治承二年正月七日における 彗星出現 が記され、彗星出現に対する解釈がない。 彗星記事 前後に配列する仏法・王法衰微の記事も覚一本と同様の特徴を持ち、山門破滅、善光寺炎上の時間を虚構し、三井寺炎上の災害状況を誇張して、彗星出現を境にして平家の悪行による仏法・王法衰微記事となる。

B 解釈あり・治承元年における 彗星出現

国民文庫本、中院本、屋代本、源平盛衰記の四本である。

Bグループの四本は、巻二の末(相当部)に 彗星出現 を記し、出現日時を「治承元年の十月か十二月」とし、彗星出現に対する解釈がある。

出現日時は、国民文庫本・中院本における治承元年の「十月」と、屋代本・源平盛衰記の「十二月」との二つに分けている。国民文庫本・中院本・屋代本三本とも、鹿谷事件の後日談・「成親死去」の末部に 彗星出現 が記され、源平盛衰記は「成親死去」に続いて、「讃岐院事」などの一連の怨霊記事を挟んで記される。いずれも鹿谷事件の怨霊とのつながりを大きく意識しているよ

うに思われる。Bグループにおける 彗星出現 記事を怨霊の
 つの伏線と見なしうる。

表 諸伝本における（彗星出現）の記述

述記の本語				彗星出現の時間	彗星の記述位置	
C		B				A
源平闘諍録	四部合戦状本 欠巻 なし	長門本 延慶本 百二十句本 平松家本 竹柏園本	源平盛衰記 屋代本	国民文庫本 中院本	覚一本 流布本	卷二の末部 治承元年十月 廿五か廿七日 治承元年十 二月廿四日 治承二年 正月七日
		解釈あり 解釈あり 解釈あり 解釈あり 解釈あり	解釈あり 解釈あり	解釈あり 解釈あり	解釈なし 解釈なし	卷三の初め
		解釈あり 解釈あり 解釈なし 解釈なし 解釈なし				

それぞれの解釈を具体的にみると、

国民文庫本は「内には・大兵」、「外には又・大きなる・うれへ」、
 中院本は「うちには大ひやうらん」、「ほかには大なるみたれ」、

屋代本は「天下大乱_テ、国二大兵乱起_」
 源平盛衰記は「大乱大兵之瑞相_」
 と、いずれも「兵乱」と「乱れ」との二つの内容で「彗星出現」
 を解釈している。

また四本における山門破滅・善光寺炎上の記事を見ると、
 四本ともに彗星記事の後に記される。（屋代本は山門破滅に当た
 る記事しかない）

C 二回記される 彗星出現

竹柏園本、平松家本、百二十句本、長門本、延慶本の五本であ
 る。五本ともに「治承元年十二月廿四日」の彗星と「治承二年
 正月七日」の彗星と、二回 彗星出現 が記される。

まず、彗星 についてみってみる。竹柏園本、平松家本、百二十
 句本の三本は、鹿谷事件の後日談「成親死去」の末部に記され、
 長門本、延慶本の二本は「成親死去」に続いて、「讃岐院事」な
 どの怨霊記事を挟んで記される。Bグループの彗星出現と同じく
 彗星 は怨霊の一つの伏線と見なしうる。

Cグループにおける彗星 の解釈を見てみると、

竹柏園本は「天下大乱国大兵乱起_」

平松家本は「天下大乱国大兵起_」

百二十句本は「天下乱れて、大兵乱国に起らん_」

長門本は「内有大兵外大乱_」

延慶本は「内有大兵、外有大乱_」

と、すべて「大乱」「大兵」と解釈している。

それから、彗星 について見てみると、竹柏園本、平松家本、百二十句本における記述内容は覚一本とほぼ同様である。この三本において彗星 が記されるのは、彗星 の「大乱」「大兵」の解釈を強調する効果を狙っているだろうか。

延慶本、長門本二本における彗星 は違ってくる。

延慶本は覚一本と同様な記述を持つ他、「何事ノ有ベキヤラムト、人怖ヲナス。」と記して、より明確に凶兆だと解釈している。

長門本は、覚一本と同様な記述に続いて、

陰陽頭泰親朝臣申しけるは、蚩尤旗にもあらず赤気にもあらず、天
文要集のごときは、太白犯昴井者、天子浮海、失珍寶、西海血流、
大臣被誅といへり、何事のあるべきやらんと、人怪みをなす。

と記され、また当天文異変を「太白犯昴井」とし、「天子浮海、失珍寶、西海血流、大臣被誅」と解釈し、壇ノ浦における幼帝入水、宝剣の紛失、平家一門の滅亡を暗示しているように思われる。さらにCグループにおける山門破滅・善光寺炎上の記事を見てみると、いずれも二つの彗星出現の後に配置されている。(平松家本・竹柏園本・百二十句本は山門滅亡に当たる記事しかない)

A～Cのまとめ

流布本・覚一本は、二つの天変記事を平家滅亡の「因」「果」

を暗示する構想のもとに取り上げている。

他の諸本は、山門破滅・善光寺炎上の記事を 彗星出現 の後に記す。覚一本・流布本のように彗星記事前後によって末法的な記事の性質が変わる効果がない。彗星出現は、「怨霊」を意識しながら、「乱れ」「兵乱」を暗示する。また兵乱の兆しであるという視点で、太白昴星犯合 の暗示機能と一致しているといえよう。

以上、諸伝本のあり方を、主として覚一本との比較の上で概観した。

終わりに

本稿は、覚一本『平家物語』に記される二つの天変・彗星出現 太白昴星犯合 のあり方及びその役割について論じてきた。

覚一本は、二つの天変に物語の展開を暗示する効果的な位置を与えている。私見では、その位置は末法と平家滅亡という物語の構想に深く関わっているものである。この二つの天文異変をめぐって、中国及び日本の記録類を調査の上で暗示の意味を確認し、さらに『平家物語』でのあり方について、覚一本を中心に、十三の諸本を検討した。

諸本は構想の差異により、二つの天変記事のあり方もそれぞれ異なっている。覚一本・流布本において、彗星出現 は、平家の悪行による仏法衰微・王法衰微、すなわち平家滅亡の原因を予

兆し、また 太白昂星犯合 とともに、平家滅亡の結果を暗示していると思われる。

注

- (1) 美濃部重克の論文「平家物語の解釈原理―先表思想」、『平家物語 研究と批評』一九九六年六月 有精堂）は、「天変」を「五行の天変」と「天文の天変」という二つの内容で解釈しているが、本論は「天文異変として天変」に関するものである。覚一本以外の諸伝本には他の天文異変記事も見られる。例えば、『源平盛衰記』卷第三十三、「源平水鳥軍事」に記される日蝕など。本論は覚一本に記される天文異変記事に限定して検討する。また覚一本「平家物語」巻第五の「咸陽宮」には、「白虹日をつらぬいてとほらず」という記述があるが、引用故事の中の天文現象であり、次元を異にすると判断し、含めないことにした。なお、『保元物語』『平治物語』『太平記』等の天文異変記事も参照すべきであるが、今回は及ばなかった。
- (2) 『史記・四』中華書局 一九五九年九月。
- (3) 齊藤国治『星の古記録』六頁 岩波新書 一九八二年十月。
- (4) 小野美典は太白昂星犯合記事以後の約三年半の天変地異の空白期間を問題にし、その三年半に、惑星現象は六回、他に地震、彗星出現もあつたと指摘している。（『平家物語の構想に関する一試論 天変地異を手がかりに』、『山口国文』第十一号 昭和六十三年三月）
- (5) 便宜的に『史料綜覧』・巻三、巻四によった。
- (6) 齊藤国治『国史国文に現れる星の記録の検証』 雄山閣 昭和六十一年十月。
- (7) 『玉葉』国書刊行会 明治三十九年六月。
- (8) 『山槐記』史料大成 昭和十年六月。
- (9) 『漢書・四』中華書局 一九六二年六月。
- (10) 『後漢書・十一』中華書局 一九六五年五月。
- (11) 『太平御覽』中華書局 一九六〇年二月。
- (12) 便宜的に六国史索引（吉川弘文館）によった。『日本書紀索引』昭和四十四年七月、『続日本紀索引』昭和四十二年九月、『日本後紀』、『日本後紀』、『日本書紀』、『日本書紀索引』昭和四十年五月、『日本三代實

録索引』昭和三十八年三月。

- (13) 『国史大辞典』『天文密奏』の項（小坂真二 一〇三五頁）によると、勅文の内容は天子の運命や国家の危殆に係る大事であったから、国史編纂の際には、占文の部分は除かれ、天変記事のみが国史に記載されたという。『玉葉』、『明月記』などの公家日記は、陰陽寮からの天文注進を途中で見失って、日記に書き留めたのである。
- (14) 『日本書紀・三』新編日本古典文学全集 小学館 一九九六年十月。
- (15) 『日本後紀』続日本後紀・文徳天皇實録』新訂増補国史大系第三巻 吉川弘文館 昭和九年十一月。
- (16) 『群書類従』第二十六輯。
- (17) 国立天文台三鷹図書室所蔵の『天文要録』の写本によった。
- (18) 齊藤国治『国史国文に現れる星の記録の検証』雄山閣 昭和六十一年十月。
- (19) 『日本紀略前編』新訂増補国史大系第十巻 吉川弘文館 昭和四十四年十二月。
- (20) 『平家物語上』二〇一頁 新潮日本古典集成 昭和五十四年四月。
- (21) 『平家物語論究』三〇頁 明治書院 昭和六十年三月。
- (22) 『平家物語必携』六十二頁 学燈社 一九八五年十一月。
- (23) 『平家物語研究と批評』七頁、平家物語の解釈原理 先表思想 有精堂 一九九六年六月。
- (24) 早川厚一・佐伯真一・生形貴重校注。四部合戦本平家物語全釈・巻七。五頁 和泉書院 二〇〇三年六月。
- (25) 小野美典『平家物語の構想に関する一試論 天変地異を手がかりに』、『山口国文』第十一号 昭和六十三年三月。
- (26) 『国語と国文学』昭和三十三年七月号 『平家物語はいかに読むべきか』に対する一試論。
- (27) 佐々木八郎『平家物語評講 上の「構造と意味」』昭和三十年二月 明治書院。
- (28) 関口忠男『中世文学序考』一九二頁 武蔵野書院 平成四年三月。
- (29) 関口忠男『中世文学序考』二〇八頁 武蔵野書院 平成四年三月。
- (30) 『吾妻鏡』新訂増補国史大系 吉川弘文館 昭和四十七年四月。
- (31) 関口忠男は、各巻の最末部（相当）に仏法と王法との衰微の諸

事件を配置していることは、仏法と王法との衰微をより効果的、また統一的にまとめあげようとする作者の意図のあることを推測させる。」と、物語の前半はどのようにに未法現象を描く視点で、善光寺炎上・三井寺炎上の時間の虚構を解釈している。『中世文学序考』一八七頁 武蔵野書院 平成四年三月。

(32) 関口忠男『中世文学序考』一五二頁 武蔵野書院 平成四年三月。

(33) 流布本が覚一本と同様に「廿一日」とするほか、諸本は「廿三日」としている。『玉葉』の養和二年二月二十三日の条により、流布本・覚一本以外の諸本は正しいようである。

主指導教員（鈴木孝庸教授） 副指導教員（船城俊太郎教授・荻美津夫教授）